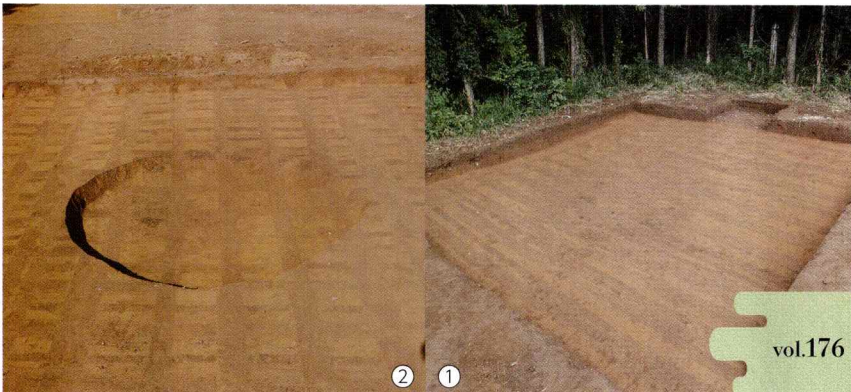


香取遺産

◀①1号住居跡の検出状況
②2号住居跡の調査完了状況



弥生時代の一軒家

vol.176

おおさきうち の いせき
「大崎内野遺跡」

大崎内野遺跡は、大崎地先に所在します。この地域は下総台地が広がり、小河川による谷が複雑に入り組んだ地形をしています。遺跡は、小さな谷に南側を除く三方を囲まれた台地上にあり、南北に約250m、東西に約150mの広さです。

調査は遺跡の北側3分の1、約1万m²を対象に行いました。その結果、弥生時代後期の竪穴住居跡が2軒見つかりました。しかも、台地の北西隅の狭い範囲に寄り添うようにしてありました。その他に住居跡などはありませんでした。2軒の住居跡は南北に隣り合い、その間隔は12mです。屋根を葺き下ろしていたとすると、その間隔はさらに狭くなります。

北側を1号住居跡、南側を2号住居跡としました。1号住居跡の大きさは長さ6m、幅4m前後で、半分が残っています。2号住居跡は直径約3mの小さな円形です。2軒とも、中央に火をたいた炉の跡がありました。出土した土器から2軒は同じ時期に建っていたと考えられます。その大きさと位置関係がまるで母屋と離れのようで、広い台地の一面に孤立した一軒家を連想させます。

この地域では、広い平野を望む台地には弥生時代の集落跡はほとんどみられず、小河川の上流域の小さい谷に面して小規模な集落跡が点在するようです。これは水害の危険が少ない狭い谷で水田を営んでいたためと思われるです。古墳時代後期になると、遺跡の規模と数が増大します。その背景には、水田などの耕地面積の拡大があり、技術面や社会面での変化が考えられます。

たった2軒の住居跡の調査でしたが、地域全体に当てはめて俯瞰することで、発掘の結果からみえてくるものがあります。